



史料室だより  
創刊号  
1981・4・1

特集・開室記念

編集 田辺眞人  
発行 神戸・深江会館  
生活文化史料室  
〒650 神戸市東区深江本町3-5-7  
電話 神戸(078)41110475

開室にあたって

深江財産区管理会長  
生活文化史料室理事 太田垣正雄

自分の住む町を愛する地域住民が、町の詳しい記録を残し、広く市民に伝えたり子供たちの教材として後世に遺すことは、誠に意義深いことでございます。私達の深江でも、これまでにはしばしば町の歴史の編さんが話題になりましたが、諸々の事情で今まで実現いたしませんでした。

度重なる高潮や空襲等の苛酷な災禍を受けて史料も乏しく、深江の歴史調査は相当の年月を要するでしょう。しかし、この事業は後になればなるほど困難です。そこで、この事業は深江が中心となつて、昨年からの実現にのりだすことになりました。

神戸市の指導のもとで、神戸史学会の田辺眞人先生(県立御影高校教諭)に、編さんを委嘱いたしました。ところが、その史誌編さんの過程で、はからずも、

二百年近くこの地で六代に亘り医館を開いてこられた深山家や、深江漁業協同組合、神戸商船大学のほか、多くの市民有志から貴重な資料の提供を受けました。そこで、これを収蔵・展示するとともに深

江を中心に地域社会の昔からの生活文化の発展を研究し、その知識の普及をはかると共に、郷土深江への愛情を養うために、この生活文化史料室を建設することになったわけでございます。

誠に小さな施設でございますが、先人の文化遺産を守り、この町の特色を生かした史料室運営をいたしたいと存じます。どうか皆様の暖いご支援とご協力をお願いいたします。

開設に際して財産区・史料室あてにお祝いの電報をいただきましたので、ご紹介します。

▽生活文化史料室のオープンを祝し今後地域社会の文化発展に大いに貢献されますようお祈りいたします。衆議院議員・元文部大臣 砂田 重民

▽念願の史料室完成お祝い申し上げます。郷土史のために今後の前進をお祈りします。衆議院議員 石井 一

▽深江民俗博物館オープンを心からお祝い申し上げますとともに郷土歴史と地域生活文化の開発に一層のご活躍を期待いたします。参議院議員 金井 元彦

▽深江の人々の熱意と田辺先生の努力による史料室の開館を祝福し今後のご発展を祈ります。県会議員 大野栄美夫

▽生活文化史料室の完成を心からお慶びいたします。神戸市総務局長 原田 健

▽開館を祝し今後の発展を祈ります。井上郷土玩具館長 井上 重義

二月二十一日、深江会館で開室記念祝賀会が開かれました。開室当初、報道関係者のご支援でこのよう

な多くの記事になりました。記録用に特集します。

日刊スポーツ 56・2・24(火)

ひびき

郷土を学ぼう、という動きが多い。自分の郷土の知識を高めたい、という人が、豊かになんて作りになれるとして、最近はやがて、歴史の時に郷土を調べたり、見学するグループが、神戸市東区深江に八平方面の、ささやかな町民の歴史博物館オープンした。阪神深江駅のすぐ南に大目川が流れている。その傍に深江会館があり、会館の西側に別荘として建てられた、明治三三年の邸宅(別荘)の遺出許可状、四ヶ條の倉庫に古用した甲冑、火かねや燗ぎ、古文房具、みんなの町人が自らの手で持ち寄った。深江町民の手で、大目川会館による、武蔵野荘村と号し、この村を、から、村史を編みだしている。

# 民俗資料持ち寄り 「街の博物館」造る

東灘・深江に「生活文化史料室」

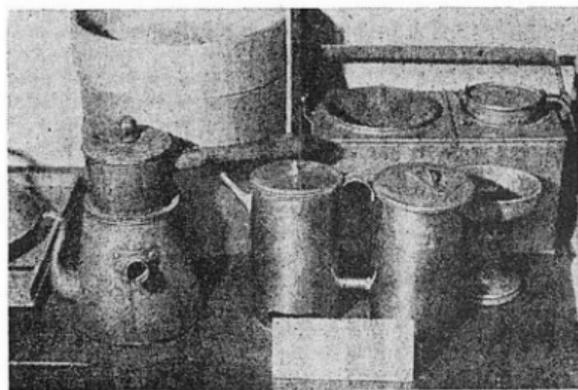


日清、日露戦争時の風船（がいせん）や通世記念の杯

## 身近な歴史探訪の場

江戸時代以降 貴重な道具など千点

郷土に伝わっている古い生活用具やがらみ等の民俗資料を後世に伝えようと、神戸市東灘区深江地区の住民たちが、旭元の神社の境内に設けた「生活文化史料室」を開設した。いわば、二階の博物館で、有志から寄せられた約千点のほろろ民俗資料の整理、陳列もはなはだ盛況であり、あつはつ二月二十一日の開館を待つばかり。しかも関係者は「史料室の主催で調査会や研究会を開いていく」と意をよそわず、郷土の歴史探訪の場となる手作り博物館として、大きな旨を築きあげた。



### 資料提供は

史料室建設のきっかけとなった深江で六代続く医師・深山健二家から收藏品の大半の寄贈を受けましたが、その他に、志井正夫氏、志井保治氏、永井彦右衛門氏、伊吹順隆氏、太田垣正雄氏、永井静江氏、深江消防団、深江漁協などから、貴重な資料の提供をうけました。

大正時代の物と思われる真ちよう製の酒かん盆



室内の飾り付けをする田辺先生(右端)と教え子、管理会の人たち



# 消えゆく郷土史料残そう

## 教え子と目録作り

—神戸・深江の民俗博物館—

### 元 県立芦屋高の田辺教諭ら

【芦屋】県立芦屋高校に勤務中、芦屋市内の郷土史料を蒐集した田辺真人教諭(左)が、神戸市東灘区深江本町三、深江・大日神社の境内に完成した深江地区管理会(大田垣正雄会長)のわが町民俗博物館「神戸深江会館生活文化史料室」で、教え子二人とともに展示品の整理や飾り付けに忙しんでいる。同室は深江地域の郷土史料を保存するたけに、新築、各家庭に散らばる生活用品を移す密着して懸念するもので、二月二十一日オープンする。

同室の建設は、大田垣会長が深江の土着の歴史を、四十九年ぶりに深江地区の村史づくりを思いついたのがきっかけ。「このままでは史料が埋もれてしまう」と考え、同会会長は、管理会の役員会、東灘区役所の人文と相談、昨年五月ごろ田辺先生を訪ねて村史の編纂を依頼した。

田辺先生は関西大学史学科卒業した四十一年春から県立芦屋高校で社会科学部担当、文政年間(一八一—一八三〇)に起きた芦屋町打出崎村(現芦屋市)と住吉、横村(魚崎)、田中、野寄、岡本六か村(神戸市)の水争いの原因にな

と申し出があったのをはじめ、区内の人たちから約千点深江会館に寄せられたので、幾時コンクリートで建てた床を約八十平方尺の史料室を新築、一階は倉庫、二階はガラスケースなど置いた常設展示場と事務室を作った。

しかし、これだけの史料は田辺先生一人で調査しきれず、調査隊が大正昭和時代の教え子、渡部水子さん(左)、(芦屋市山手町)と深江尾崎さん(左)、(同市野町)が今年初めから協力、土、日曜に分業、目録づくりを手伝っている。

展示品は、関ヶ原の戦いで使われた刀、かぶと、日清、日露戦争の軍服、陸軍、酒造師のはっぱ、半鐘、深江地区の引き巻から二百年前のサマ、ハチマキの陶器、慶応三年(一八六七)の大相模、明治時代の木の茶碗、銅貨、天びん、針、医学書、新聞、大正時代の番書とレコード、煙、カルペンなど。また、昔のコブの形、鹿角、大漁旗もあり、堤、武器、金、おもちや、衣類の百分野にわたって文化遺産を多く含まれている。オープン後は土、日曜に開館、四季ごとに展示替えの予定。





東灘区深江地区

「三二歴史博物館」

住民の力で建設

史料や民具集めて

江戸中期からの千二百点

「てきや、わいの、三二歴史博物館」―地域のみなちの手で作られた町の民俗史料館「神戸江合船生活文化史料館」が神戸市東灘区深江本町三に完成、二十一日にオープンする。

きょう、オープン祝う

深江地区は旧武庫本庄村で、昭和十六、七年頃に村の歴史を後世に残すと、村発刊の計画があった。しかし、その年、戦災や水害などで計画が中止され、二十五年に神戸市に編入された。

五十年ぶりに住民の間で再び、旧村の歴史を継ぐため「深江史館」を発刊しようとの声が出て、史料の収集や整理をはじめ

た。神戸史学会委員で、元立部部長の校長、田辺入さぶろに作業を依頼。地元の深江町長兼連合会(田辺正徳会長)が、回覧板で八〇五戸の別荘を連絡。主な民具や古道具を展示した。

語学文化史の調査一写に集めて展示し、住民に広げてもらうことになった。深江会北側に鉄筋二階建て、八〇五戸の別荘を連絡。主な民具や古道具を展示した。

史の中には江戸時代中期から明治時代にかけての歴史の現状やカルネなど農業や医学関係の古文書や、大正十二年九月の関東大震災を伝えた大震災日新聞の号外など、また完成の歌として有名な打出の海風歌集、近世の台歌に使われたかぶら火踊り、大正期の子供のまじごと道具、クワ、スモ、とうもろこしの農具などを一、二階に展示している。

田辺会長は「町の人たちの手でつくりたい。三二博物館」が作られたのは神戸市内でも初めて。今後は年四回ぐらい特別展を開くほか、講演会なども催し、地区の歴史センターにしたい。地元の小、中学校からも見学申し込みがきている。深江史館の発刊は三、四年先をメドに進めたいと話している。

開室式は午後七、八時、日曜日に開く。午前十時から午後五時まで。入館は無料。



地域の人たちの手で完成した生活文化史料室

「三二歴史ツアー」(友の会)  
開室一月で史料室を支える友の会小嶋悦郎代表)の会員は約百名となり、半日の散策を計画しました。  
四月十二日午後一時、阪神大石駅に集合、沢の鶴酒造資料館を見学し、酒蔵地帯を訪ねます。今後、身近な歴史発見の散策や他地方の文化に接するバス旅行など計画。年会費千円です。ぜひご入会を。

# コンクリート砂はくじに 地域文化の花を開く

神戸深江会館  
生活文化史料室

神戸市東灘区深江本町三に地域  
の民衆や史料を集めた二階建博  
物館「神戸深江会館生活文化史料  
室」がこのほどオープンした。さ  
るかな史料が、住居たまたま  
力を合わせ「地域の文化遺産を後  
世に残そう」と、史蹟集約の過程  
で卒った。各地でよく運動が  
コミュニティ活動がめめられて



いるが、コンクリート砂の大部  
分を、自分たちでいる町の歴史  
史を知らないが増え、ふるさとの  
意識も薄いのではないか。そんな中  
で誕生した史料室の完成を取材し  
て、地域の人々の土地に対する  
愛情に深い感動を覚えた。神戸  
市の街の片々に咲いた地域文化  
の一輪の花が、大きく、豊かにな  
るまで、市内各地でも花開いてほ  
しい、と願っている。

(写真 大木紀敏氏)



まず資料から紹介しよう。阪  
神電鉄深江駅南の白根女(お白  
ひるめ)神社境内に、深江町地区  
資料室の「深江会館」がある。史  
料室は、その北隣。鉄筋二階建  
で延べ八千平方メートルほげな  
リームの建物だ。内部には改  
修後の二十坪ほどは旧村が神戸市  
年(八五四一八六〇)に編  
組した歴史を誇りに記した  
屋敷名簿(現在のカルテ)や明  
治三年の地土簿(税簿)の複写  
あり。近頃合戦に使われたかごと  
や火難、農具、地元の家として  
代々の「打出屋」の陶器、大木  
の地蔵の写真、新聞など千五百  
冊。医学部関係の資料は江戸末期か  
ら大木も残っている医師が提供  
し、消防関係は深江消防会館の  
消防用器具探し出し、神社の宮字  
帳代は、社殿から民衆や史料を見  
つけ、婦人会は、その目で昔の  
生活用物を集めた。「ウチにん  
な古い物があつたが」と近所  
で誕生した住居もといひ。

とてろで資料室は旧村(深江 提供された。  
村の村誌(深江史誌)を編集す  
る過程で生まれた。村誌刊行の計  
画は昭和十六、七年ごろから。  
が、阪神大震災、神戸大震災、  
ジャーン白根の高層新築などで  
史資料が散失し実現しなかった。  
神戸市の中心には、特に無関心人が  
多い頃。新しく移り住んでき  
た人多い街では、とりわけ各  
種知識が強い、仕事の側で各  
種資料の二十坪ほどは旧村が神戸市  
に編入され、明治時代には資料を  
買足された。深江村も、現在  
は約六千三百(約一万)戸  
敷人口が増え、街の様子もず  
かり変わった。新しい住居が増え  
て地域の歴史を知る人も数少なく  
なつた。このため、深江町地区管  
理会を中心に街への住民らが、  
文化遺産の発掘に協力した。

「旧村の歴史を後世に伝え、伝え  
たい」と五年半「深江史誌」の執筆を依頼されて  
いる神戸史学会の田島順久さん  
「これは「土地に対する愛着」  
を再び呼び出す。地域の歴史、  
民俗、農具、婦人会、消防団、  
児童会、青年会、全戸六千  
二、二一文化施設を作るとか、  
呼びかけ、これら史資料や民具が  
また、といひ。

また、各地で市町立など行政保  
が設けた民俗館や歴史博物館、郷  
土歴史館を数多く見てきた  
1981年  
(昭和56年)  
3月22日  
(日曜日)

## 土地に「深い愛着」

### みんな探した史料、民具

が、資料だけおさなりの  
も少ない。法から民間な  
とを半強制的にかり集めて郷土博  
物館を作ったり、展示したまでにはか  
を前に生かす街づくり、に設立  
下うとの勢は評断できる。  
深江町地区管理組合の太田道  
正さん(右)は「ちげな史料  
を定んすが、新しく移り住んで  
きた住民にも、地域の歴史を知る  
特したい。

住民がつくった二階建の中  
(右)村誌を執筆する田島  
真久さん、左は深江財産管理  
会長の太田道正様さん

歴史博覧会や民具などを通して、  
住民と密着した「歴史文化センター」  
「に「深江」を話す」  
地域の歴史を、地域の人々の手  
で、地域の人々の手に残す、いわ  
ば「根文化」。こうして地域  
文化の輪が、コミュニティ活動  
や地区住民の団体に設立し、住  
まい、よい街づくりをすすめていく  
特したい。

